

講演会・シンポジウム報告

日本語教育研究センター (RCJLE)

2017 年度連続講演会

「読解：認知的過程から読解教育への応用まで」第4回

どうすれば読解授業がうまくいくのか
—学術日本語を学ぶ留学生のピア・リーディング授業を対象に—

日時：2017 年 6 月 28 日 (水) 15:30-17:30

場所：本館 260 教室 参加人数：113 名

講師：石黒圭氏 (国立国語研究所 日本語教育研究領域 代表・教授)

本講演では、どうすれば協働学習の読解授業がうまくいくのか、アカデミックな文章を学習者がグループで読みあうピア・リーディングの授業を対象に、分析・検討を行います。分析・検討の観点として、

- ① ピア・リーディングでどんな課題を設定するか、
- ② ディスカッションのグループをどう分けるか、
- ③ ディスカッションの談話をどう指導するか、
- ④ 学習者へのフィードバックをどう行うか、
- ⑤ 戸惑う学習者をどう励ますか、
- ⑥ 個々の学習者をどう評価するか、

の六つを紹介する予定です

本講演では読解授業の新たな潮流の一つとして、対話による読解授業「ピア・リーディング (以下 PR)」の取り組みが紹介された。アカデミックな文章を学習者がグループで読みあう PR の授業を対象に分析・検討を行い、どうすれば協働学習の読解授業がうまくいくのかを探ろうとしたものである。課題シートや学生の談話データ、授業後のコメントシート、インタビューにおける談話を収集し、より効果的な PR を行うために重要な 6 つの観点、すなわち、課題の設定、グループの分け方、ディスカッションの談話指導、フィードバック方法、個別支援方法、中級学習者への適切な対応のあり方について分析が行われた。その結果から、それぞれの点について、これから PR を実践しようとする日本語教師にとって非常に示唆に富む具体的な提案がなされた。参加者は PR の一つの課題として「接続詞を入れる」に取り組んだが、個人での作業の後、グループディスカッションを経ることにより、接続詞の選択には読み手一人ひとりの「読み方」が表われること、その選択の裏にある文章の解釈は読み手によって異なっているということを実感することができた。

講演者の豊富な研究成果に裏付けられ、かつ、非常に具体的な内容で、今回のテーマについてすでに知識を持っている参加者はもちろん、初めて接する参加者にもわかりやすい内容であった。

(文責：澁川晶)

日本語教育の高大接続 — 日本国内の高校と大学における日本語教育の連続性を考える —

日時：2017 年 10 月 29 日 (日) 13:00-16:30

場所：ダイアログハウス国際会議室

参加人数：約 40 名

登壇者：内藤満地子氏 川崎由起子氏 The American School In Japan 高等部教諭

田中小静氏 篠原小枝子氏 Saint Maur International School 教諭

中西弘一氏 国際基督教大学高等学校 教諭

日本国内の大学の日本語教育プログラムでは、受け入れた学生の日本語力や教育背景が以前に増して多様化しており、学習者のニーズに応える日本語教育の在り方の模索が続いている。一方、日本国内の高校でも多様な日本語教育が提供されるようになり、また、カリキュラム改革も進んでいる。高大接続の重要性は様々な側面において指摘されているものの、学校段階を超えて互いの日本語教育プログラムについて情報交換をする場は限られている。そこで、本イベントでは、大学と高校の双方の日本語教育プログラム関係者が互いのカリキュラムや課題を共有し、学習者にとってより良い日本語教育の形を議論する。

当日は、まず、国際基督教大学 (ICU) 日本語教育プログラム (JLP) の理念やカリキュラムの概要が報告され、JLP が大学の初年次教育という機能を担っていること、大学での学修に必要な日本語力として JLP ではどのような学びに重きを置いているかが話された。次に、本学に長年卒業生を送り出してくださっている国内の高校から日本語教育・国語教育担当者が各校の概要と日本語・国語教育のカリキュラムについての報告があった。その学校は、アメリカの Advanced Placement を導入している The American School in Japan、国際バカロレアプログラムを導入している Saint Maur International School、一条校の ICU 高校の 3 校であるが、各校のよってたつ教育制度やカリキュラムの共通点や相違点が明らかになった。

本シンポジウムでは、大学側・高校側の教育の目指すもの、カリキュラムの特徴や具体例を提示しあった結果、受け入れ側の大学、送り出し側の高校の双方が高大接続の重要性、連携を強める必要性を実感することとなった。

事前登録状況からは 50 名程が参加する予定であったものの、台風が東京上陸当日という悪天候に見舞われ、キャンセルも半数近くに達した一方で、当日参加も少なくなく、本企画への関心の高さが窺われた。講演会後には登壇者への質問やコメントが多く寄せられた他、来場者相互でも情報交換をしたりネットワーキングをしたりしている様子が見られ、参加者の期待に応えたシンポジウムとなった。

(文責：小澤伊久美)